



AUE Monthly



2010年 1月 5日

第 18 号

編集・発行

愛知教育大学広報部会

TEL 0566-26-2738

FAX 0566-26-2500

目次

- 松田正久学長の年頭あいさつ
- 行事予定(1月)
- トピックス
 - ・ロータリーのイルミネーションが点灯
 - ・外国文化紹介のプレゼンテーションを実施
 - ・創立60周年記念フォーラム, 連続講演会が閉幕
 - ・愛知県内4国立大学の学長らが民主党議員と意見交換
 - ・書道展で文部科学大臣奨励賞受賞の学生を表彰
 - ・2009年度第2回環境ミーティングを開催
 - ・教職大学院をNHKが取材
- ・本学係長・主任研修を実施
- ・卒業生, 故鈴木千恵さん記念展示が始まる
- ・冬の子どもまつりを開催
- ・「摩擦の科学」会議を主催した三浦浩治教授インタビュー
- お知らせ・報告・投稿
- ・附属岡崎中学生3人がジュニア数学コンクールで入賞
- ・本学寄贈バス, アフリカ女子大で贈呈式(NPO代表が報告)
- ・環境報告書で本学が「省エネ日本一」(投稿)
- ・井戸准教授からのフィンランド便り

松田 正久学長の年頭あいさつ(2010/1/5)

あけましておめでとうございます。年初に当たり、国立大学法人愛知教育大学学長としての年頭の挨拶を申し上げます。

皆様ご存知のように、一昨年秋のリーマンショックが世界経済の大不況を引き起こす中で、人々は「CHANGE = 変化」の期待を背負って、昨年はアメリカのオバマ大統領の就任式から始まりました。わが日本でも、「変化」を求め、8月の総選挙では国民は「政権交代」を選択し、鳩山新内閣が誕生しました。世界全体がある種の「変化、変革」の中にあることを示した1年でした。

世界中の期待の中で誕生したオバマ政権は、パワーポリティックスから抜け出していないようにも見えます。昨年来の新型インフルエンザの流行も、社会基盤の脆弱性を顕在化させました。また、コペンハーゲンでの昨年末の気候変動に関するCOP15は、多くの人々の期待を裏切る結果となりました。

高等教育の大部分を私学セクターに委ねている国は日本と韓国だけですが、韓国は、国立大学、国立の教育系大学のインフラ整備に相当の投資をしていると、実感しました。

我が国の人口は、2050年には低位推計では1960年の水準の9000万人に下がりますが、当時と決定的に違うのは、子どもの数が格段に違うことです。1960年には0歳から14歳までの人口は2800万人であったのが、2050年予測では750万人と約4分の1になると予想されていること



です。こうしたことを考えると、一人ひとりが十分な教育を受ける環境を整え、国際的にも高い能力を発揮できる人間の教育を行う以外に道はないことがわかります。そのためにも高等教育は国の責任において無料で行うための環境整備、国立大学への投資が必要で、必然的にヨーロッパ型の社会を志向する社会構造の変革が必要だろうと思います。こうしたことから、高等教育の無料化を宣言した国際人権規約第 13 条を批准していない国は日本とマダガスカルだけです。是非早急に批准してほしいと思います。

12 月末に決定された来年度予算は、史上最高の一般会計 92 兆 3000 億円、一般歳出 53 兆 5000 億円となり、その中で運営費交付金は 2009 年度比で 0.94%、110 億円減となりました。本学では、運営費交付金は、人件費の 80%相当ですので、その他はすべて授業料等納付金に依存しています。この点からも、学生第一の大学運営が重視されなくてはなりません。

まず、今後の高等教育、特に教員養成をめぐる問題について、民主党はマニフェストの中で、教員養成制度の抜本的見直し、すなわち 6 年制による教員養成を掲げ、この 1 月からの検討会議の中で法制化を来年 1 月の通常国会で図る計画を示しています。日本教育大学協会では教員養成政策特別委員会を昨年末に作り、二つの部会で、2 月の理事会に向けて精力的に議論を行っています。この問題は、現在の教員養成の仕組みをどのように総括し、どの点を改め、教員の専門職化・高度化を図るのかの視座から検討を進めねばなりません。

本学固有の問題ですが、昨年 10 月に発足した教育創造開発機構の役割を一層明確にし、中部地区の中核的教育系大学として、その充実に努めたいと思います。また、現在、静岡大学との共同大学院制度を活用して、博士課程設置に向けた検討を進めています。教員養成の高度化のためにも、新しい形での博士課程の本学への設置を進めたいと思います。

もう一つは、教育組織・教育課程の改革です。教員養成課程にあっては、新政権の教員養成政策を視野に置きながら、小・中の 1 種免の必修化を含め、教科別と課題別の教育組織に再編するなど、結論の迅速化をはかります。また、現代学芸課程にあっては、学部化の可能性も含め、学芸教育を進めるにふさわしい教育課程に必要な組織の再編を進めます。これらのプロセスを進めるにあたっての原則は、教育組織の効率化、たとえば、単位組織の学生数最低 30 人にするなどですが、こうした原則の下に進めることです。広く社会に必要とされる教育、教員養成を進めるための教育組織にすることです。時代を先取りする教員養成教育・学芸教育を本学に展開するため、リーダーシップをとって行きたいと、強く決意しています。

附属学校の改革も焦眉の課題です。今や、地域のみならず全国に存在感のある付属学校でなくては、その存在説明は通用しない状況も出てきています。「学長のリーダーシップによるマネジメント機能を強化」するとした中期目標に沿って、「国レベルをはじめ地域の教育課題の解決と学校教育の発展に寄与する」附属学校に改革していきます。

この 4 月からの第 2 期中期目標・中期計画が本学の進むべき方向を示しています。記載されている課題を達成していくためには、事務組織の改革も欠かせません。できるだけ横に広がった組織をどのように構成し、一人一人の能力が最大限発揮できるにはどうすればよいか、皆さんのアイデアも活かしながら、大胆な組織改革を進めたいと思います。

さて、皆様の中で、大学がどういう方向に進もうとしているか、どうしたいのか、役員の意向が十分伝わってこないという声を耳にします。こうした声に耳を傾け、役員一同、皆様との対話が進むよう積極的に意見交換をしていきたいと思っています。人事院勧告に従えば、2010 年度は 12% ですが、これは今の財政状況では難しいと認識しています。できるだけ 9%支給が継続できるよう、努力してみたいと思っています。また、4 月から労働時間は一日 7 時間 45 分に短縮します。これが、結果として残業代のアップにつながらないよう、労働時間管理をより厳しく行いたいと思います。

また、教員の方々に対しては、基盤的教育研究費の配分を維持できるよう最大限の努力をする所存です。本来は科研費に頼らなくても研究が遂行できるのが基本だと思いますが、そうでなくなっているのがこの間の我が国の現状です。新規申請数が来年度こそ 100 件を超えるよう、今から準備をしていただくと同時に、不況の中での学生の生活状況や就職状況把握など、一人ひとりの学生に目を向けた対応をお願いします。研究者総覧や評価書の提出など、きちんと守っていただきたいと思っています。

何事が起こっても、その時点での最善の選択を出来るように、しっかりとやっていきたいと思

います。本年もどうかよろしくお願いいたします。

(要旨)

行事予定(1月)

- 5日(火) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 6日(水) 教務企画委員会(13:30~ 第二会議室)
学生支援委員会(13:30~ 第五会議室)
大学改革推進委員会(15:30~ 第三会議室)
- 7日(木) 教員人事委員会(9:00~ 第五会議室)
- 12日(火) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 13日(水) 代議員会(13:30~ 第五会議室)
教育研究評議会(代議員会終了後~ 第五会議室)
- 18日(月) 財務委員会(13:00~ 第一人文棟3階会議室)
安全衛生委員会(15:00~ 第五会議室)
- 19日(火) 役員会(13:30~ 学長室)
- 20日(水) 教職員会議(13:00~ 第一会議室)
教授会(13:30~ 第一会議室)
- 21日(木) 教育研究開発機構委員会(15:00~ 第五会議室)
- 26日(火) 経営協議会(10:00~ KKRホテル名古屋)

トピックス

ロータリーにイルミネーションが点灯(2009/12/1)



本学バス停前ロータリーに巨大な龍のイルミネーションが12月1日(火)に登場,同日夕,点灯式が行われた。龍は頭部が高さ約2.5mあり,地中に潜った胴体部分も想像すると,体調は20mに達しそうな巨大さ。龍は大きな口を開け,しっかりと持った宝珠は提灯で,炎の中に創立周年記念を表す「60」の数字が描かれている。美術教育の2年生31人が8月から構想を練り,10月から制作してきた。

点灯式は午後5時から行われ,白,青,赤色の光が輝くと,学生らは歓声を上げ,記念写真を撮影していた。龍に使用したLEDは約3000個といい,バス停にも電飾が施され,ロータリー帯は光に覆われた。女子学生は「大学の60周年を記念して,さらに力強く発展してほしいとの思いを昇龍に託しました」と目を輝かせていた。

イルミネーションは毎夜,本年1月22日まで点灯される予定。

外国文化紹介のプレゼンテーションを実施(12/4,12/18)

本学と協定を結んでいる香港教育学院からの留学生3名によるプレゼンテーションが12月4日(金),第二共通棟412教室で開催された。キャンパス内英語イメージルームの活動の一環として行われ,英語で香港や香港教育学院の紹介がされた。食べ物,土地,大学でのアクティビティー,体験話など,学生たちに身近なトピックで,スクリーンに映った町並みの美しさに,20人近い参加者が熱心に見入っていた。留学生たちが用意したソーセージの試食,



簡単な広東語の紹介など、香港や、香港教育学院の魅力をあますことなく伝えた参加型のプレゼンとなり、質疑応答では積極的に手を挙げて質問する参加者の姿が見られた。

また、12月18日（金）には、第二共通棟412教室で海外留学経験を持つ2人の日本人学生と、アメリカ人留学生による発表が行われた。ドイツ、アメリカにそれぞれ留学した2人の日本人学生は、その時の経験を写真や映像を交えて英語で発表し、語学の苦労話や日本とは違う生活様式、クリスマスの様子、また、ドイツの都市フライブルクに伝わるジンクスの話など、多岐にわたる興味深い発表内容。途中、ドイツの伝統的なクリスマスクッキーの試食があり、雪をまぶしたような見栄えと美味しさに笑顔が広がった。

アメリカのポールステイト大学からの交換留学生によるプレゼンでは、クリスマス時期の一般家庭におけるハウス・デコレーション競争やクリスマス料理、プレゼント交換の様子、また町の雰囲気などが色鮮やかな映像を通して説明し、参加者たちは場面が変わるごとに歓声を上げていた。

英語イメージルームは2009年6月に開設。毎週水曜日と金曜日の2回、英語を使って海外留学生たちと気軽に交流する会が開催されており、3人の留学生も「ピア・サポーター（英語を話す中心的なリーダー）」として活躍している。ただし、本年1月～3月ごろは試験期間と重なるため休止予定。



創立60周年記念フォーラム、連続講演会が閉幕(12/5, 12/12)

本学創立60周年を記念したフォーラム、講演会が前月に引き続いて開催され、無事終了した。

「愛知教育大学地域連携フォーラム2009」は12月5日（土）、本学第二共通棟411教室で開催された。二部構成で、第一部では愛教大、愛知県立大学、名古屋学院大学の学生による地域連携活動の実践報告で、二部ではパネルディスカッションが行われた。

開会に先立ち、本学地域連携センター長、横地正喜理事が「他大学と情報を共有しながらそれぞれが特色を出していくことが大切ですが、地域連携のあり方を巡っては新たな課題も見えてきました。本日の議論の進展、連携の広がり期待したい。本学も地域連携センターができ、本年の創立60周年に当たり連携を一層活発にしていきたい」とあいさつ。野田敦敬本学教授の司会で進行した。

学生の報告では、愛教大からは、大学院生が日本語教室やさまざまな行事を展開する外国語児童生徒のための学習支援事業と食育キャラクター「食まるファイブ」で地域の小学校の食育をコーディネートしている活動を報告。愛知県立大学の学生は国際ボランティアサークル、大学の難民サポーターズの活動を紹介し、名古屋学院大学の学生はIT講習会を開催し、70～75歳（最高齢85歳）の市民らにパソコンの使い方を初歩から教えて好評だった事例を説明した。それぞれの報告に集まった約100人の参加者から大きな拍手が送られた。

第二部のテーマは「大学間連携による地域貢献のあり方」で、パネリストは加藤史朗愛知県立

大学地域連携センター長、木村光伸名古屋学院大学教授（大学コンソーシアムせと協議会会長）、島崎義治人間環境大学教授（岡崎大学懇話会幹事）と横地センター長の4人。加藤センター長は「異文化コミュニケーションの能力を高める教育が期待されている。大学にとって一番の地域貢献は優れた学生を世に送り出すこと」と述べ、木村教授は地元でのコンソーシアムの立ち上げから、企画の検討などを説明。「参加者を増やし、人を変えて組織の活性化を



図っていきいたい」などと語った。島崎教授は大学の知的資産を活かして地域活性化を目指す大学懇話会の設立趣旨、講座「岡崎学/岡崎を考える」の実施などを紹介、市民の関心の高さを強調した。横地センター長は教員養成系大学として地域教育連携推進協議会、地元各市との連携協定や訪問科学実験、公開講座の実施などを挙げ、「大学間連携による社会貢献の進め方などが課題」と語った。

テーマの大学間連携について議論も出たが、木村教授が「各大学が具体的な場面で連携できる相手を自立的に探り合うことから始める必要があるでしょう」とまとめた。

本学OBで作家の清水義範さんによる講演は12月5日(土)、第二共通棟431教室で開催された。「日本語は変わっていく」と題した講演には、休日にもかかわらず約60人が参加し、ユーモア溢れる独特の“清水節”に時に大きな笑い声を上げながら、熱心に耳を傾けていた。

司会を務めた阿部和俊人文社会科学系学長補佐は清水さんが本学の国語科OBで、作家の半村良氏に認められ、作家への道が開けたエピソードを紹介。登壇した清水さんは「知力からバスに乗ってきたが、当時のことはよく覚えていない。半村氏から手紙をもらい上京したが、私は本学卒業時に唯一就職が決まっていなかった男だった」と語り始めた。

本題に入ってから清水さんは「老人がイライラする間違った日本語」「言葉は変わっていくものである」「なまめかしい、の変化について」など参加者に配布した資料に沿って日本語談義を続けた。「地方の人はバイリンガル。方言を大切に」「カメラ目線などというが、昔は視線だった」と解説。「こだわり」について「熱心さ、思い入れなどいい意味で使われているが、元々は小さなことにとらわれ、気にする、男らしくないことを意味していた」と話し、また「なまめかしい」は「平安時代前期は未熟な振る舞いで感じがいいことを表現していたが、平安後期には女っぽい、セクシーである、と意味が変わった」と蘊蓄を披露。「夢」も本来は夜見る夢で、信長が好んだ謡曲「人間五十年、下天のうちをくらぶれば夢まぼろしのごとくなり」を例に引き、ぼんやりとしてはかないの意味の「夢」がいつしか望み、希望に変わったと述べた。そして若者言葉に理解を示しながら「翻訳により、新しい表現が生まれている。夏目漱石らが江戸時代の非論理的な言葉を論文が書ける日本語にした役割は大きい。言葉は一定ではなく。変化は必ずしも悪化ではない」と持論を展開、参加者の中にはメモを取り、しきりにうなづく姿が目立った。



本学創立60周年記念事業としての連続講演の最後となる異色の元高校教諭、宮本延春氏の講演が12月12日(土)、本学第二共通棟431教室で開催された。

宮本氏は愛知県出身。いじめに遭い、中学校卒業時まで「九九」が言えなかった。10代で天涯孤独となり、その後、物理学に目覚めて勉学に励み、理学博士となり、母校の教師となった。『オール1の落ちこぼれ、教師になる』を出版、話題に。エッセイストでもある。

「未来の君が待つ場所へ」と題した講演で宮本氏はテレビドラマ「金八先生」で自分が紹介され、驚いたエピソードを紹介。いじめで給食費を取り上げられ、耐えるしかないと思ったことなど厳しい体験を語った。中1で9教科の合計が一桁だったといい「当時はあきらめていた。勉強の方法がわからなかった。しかし、誰にでも言えることだが、正しい方法で勉強し、時間があれば成績は確実に上がることをその後知った」と振り返った。強くなろうと始めた少林寺拳法では17歳で世界大会へ行くのだが、16歳で最愛の母が病死、18歳で父が死去した。貧しさ、父親の看病をしながらの肉体労働など過酷な青春時代

を明るい笑顔で語る宮本氏。現在の夫人と出会い、さまざまなことを教えられ、ある日、アインシュタインに興味を抱く。「絶望という言葉さえ生ぬるく感じる生活だったが物理を猛烈に知りたくって生活が変わった。そして「どんな子どもでも輝かしい未来を持っている。待っている場所へはその人しかたどり着けない。周囲の人は子どものいいところを見つけて褒めてやるのが大事。もちろん、成長には痛みがあり、試練が成長を促すと思う」と語り、熱心に聞いていた約 80 人から大きな拍手が送られた。「講演するのは皆を元気にしたいから」とも話した宮本氏は聴衆を勇気づけ、経験に裏打ちされた教育の真髄に触れた学生らの中には感動のあまり、目を潤ませる人もいて連続講演の掉尾を飾る最終講演となった。

創立 60 周年記念事業実行委員長の阿部和俊学長補佐の話 2009 (平成 21) 年は多くの国立大学が創立 60 周年の年であった。人間の一生にも節目というものがあり、その代表が言うまでもなく還暦である。大学にとっては、50 周年の方が重要な気もするが、大学を人間の還暦になぞらえて祝いたくなる気も十分に理解できる。

2009 年に入って、学長より 60 周年記念事業の担当を命ぜられた。記念事業として何をしようかと考えたが、やはり、式典と記念講演がメインイベントであろうということに落ち着いた。前者は学長はじめ事務局の方で取りしきっていただくことになり、私はもっぱら記念講演を担当することになった。講演者を絞り、3 月より交渉に当たって、11 月半ばから 12 月半ばまでの約 1 カ月の間で 5 人の講演のスケジュールを組んだ。集中しすぎるとい印象ももつが、集中している方が記念事業として盛り上がるのではないかと考えたからである。

3 月の時点では随分先のような気がしていたが、終わってみればアッという間のことであった。この間新型インフルエンザが流行し、講演の開催を心配したこともあったが、今ではいい思い出である。



愛知県内 4 国立大学の学長らが民主党議員と意見交換(12/6)



愛知県内の国立 4 大学の学長、副学長と同県、東海比比例選出の民主党国会議員、同党県連幹部らとの意見交換会が 12 月 6 日(日)、名古屋市東区泉 1 の同県連会議室で開催された。4 大学のトップが揃って国会議員団と公式に意見交換するのは初めて。

議員は伴野豊県連代表はじめ国会議員 9 人と愛知県議らで、大学側は本学の松田正久学長、折出健二理事はじめ瀧口道成名古屋大学総長、松井信行名古屋工業大学学長、稲垣康善豊橋技術科学大学副学長らが出席。伴野代表が「次世代を育成していただ

ている皆さんに集まっていた。事業仕分けで無駄な部分だけでなく、筋肉まで斬り込んだ面があるかも知れない。日本は人がすべてで、人材育成は重要と考えているが、ご意見を伺いたい」とあいさつ。松田学長が「知的基盤社会づくりの中で教育は 10 年、20 年かけて子どもを育てている。新しい高等教育のあり方を考えていただきたい。今後もこのような機会を年 4 回程度設けることを提案したい」と述べた。

各大学からの説明に移り、瀧口名大総長は「地域に根ざした教育で、日本の活力は名古屋からの思いでやっている。資源は人材しかなく、今投資しないと次世代に禍根を残す」と主張し、松井学長も「大学は指導要領がなく、期待値を背負って教員が教えている」と国立大学の役割を、稲垣副学長は榊佳之学長メッセージを読み上げ「一貫して地元との産学連携を進め、その結果、世界に知られる企業も生まれてきた」と成果を強調した。松田学長は日本の教員養成の現状、愛知教育大学の実情を紹介するなどして理解を求めた。伴野代表は「チェンジをチャンスにして次世代を育てる機会にしたい」と話した。

書道展で文部科学大臣奨励賞受賞の学生を表彰(12/9)

本学初等教育・理科選修3年の萩原由希子さんがこのほど、毎日新聞社・伊勢神宮崇敬会主催の第48回伊勢神宮奉納書道展において文部科学大臣奨励賞を受賞した。

これを受けて12月9日(水)に学長室で学生の表彰式が行われ、松田学長から賞状と記念品が贈られた。

萩原さんは小学1年の時から書道を始め、本学でも書友会に所属して活動しており、今までいろいろな書道展に応募したが、このような大きな賞を受賞したのは初めてという。また、学長から表彰されるということで、親も大変喜んでいて、と嬉しそうに話し、立派なトロフィーと賞状を見ながら、学長と歓談した。



2009年度第2回環境ミーティングを開催(12/14)



本学の2009年度第2回環境ミーティングが12月14日(月)昼に第一共通棟1階で開催された。

ミーティングは、教職員の呼び掛けで、本学の環境について関心のある学生と年数回開催されている意見交換会で、この日は保健環境センターの岩崎公弥センター長はじめ教職員、学生ら計19人が出席した。

環境報告書関連の報告と環境リサイクル市及び関連する卒業時のごみ対策等について意見交換を行い、学生からは、「回収方法」「学生への周知方法」などについて積極的な意見が出され、改善に向けて今後の検討していくことになった。

教職大学院をNHKが取材(12/14~12/16)

本学大学院教育実践研究科(教職大学院)の大学院生や授業、本学の先進的な取り組みなどを紹介する番組制作のためNHKが12月14日(月)~16日(水)、本学内外で取材した。民主党政権で教員養成6年制が議論される中、教職大学院の現状と同制度へ移行する場合の課題などに焦点を当てたもので17日(木)夕方の「ほっとイブニング」で放送された。

取材は大学院1年、堀部美咲さんが知立市内の小中学校で習字を教える姿や大学院の学級経営実践



演習の授業、本学の折出健二副学長へのインタビュー、会議の様子、院生の自習風景、堀部さんへのインタビューなど。演習では学級づくりのさまざまな手法、留意事項などを具体的に考える実践的な授業で、言葉で図形を伝達するゲーム、班づくりの方法などを学ぶ様子が撮影された。

「班づくりは好ましい人間関係をつくる内容と方法が一致しないと意味がない」などと指摘する教員の言葉に院生はしきりにうなずくとともに「教員の仕事は想像の世界だが、現役の先生の知恵を吸収するのは素晴らしい」「理論と実践の融合を学べるのはありがたい」「教員になると、教育理論を勉強する機会がなく、この大学院はそれを満たしてくれる」などの感想、意見を述べていた。

本学係長・主任研修を実施(12/17～12/18)



2009年度の本学主催の係長・主任研修が12月17日(木)、18日(金)、本学第五会議室で開催され、対象者30人が参加した。役割認識と職務遂行能力の増進を図るのを目的に、研修は部下指導の考え方やコミュニケーション力、リーダーのマネジメント力を身に付ける内容。次世代の大学事務を担う職員に対する2日間にわたる本格的な研修は本学では法人化後初めて。

17日の開講式で富岡逸郎事務局長が「一方的に話を聞くだけでなく、参加型の研修になります。これからは皆さんの時代。研修の成果をつかみ取り、1人ひとりが力を発揮していただきたい」とあいさつ。続いて、企業、団体の研修を数多くこなしている講師の指導で業務管理、部下指導の個人、グループワークなどが行われ、参加者は真剣な表情で研修に集中していた。

18日も目標管理、リスク管理などの研修を終日実施、修了者に修了証書が交付された。

卒業生、故鈴木千恵さん記念展示が始まる(12/19)

本学の日本語教育講座の卒業生で、2009年2月にモンゴル・ウランバートルで事件に巻き込まれ死去した鈴木千恵さん(享年38)の足跡をたどる「鈴木千恵さん記念展示」が12月19日(土)、附属図書館2階の多目的利用スペースで始まった。

展示されているのは鈴木さんの遺族が同図書館に寄贈した約130冊の本をはじめ、ロシアやモンゴルで活躍する鈴木さんの写真、教え子からの手紙、その死を悼む新聞記事など。花が飾られた会場では学生らが、資料を通して日本語教育にかけた先輩の情熱に思いをはせながら感慨深げに見つめていた。

鈴木さんは北海道出身。1993年、本学を卒業した日本語教育コース3期生で、その後ロシア、モンゴルで日本語を教え、学生らから慕われていた。その死を悼むとともに遺志を後輩に伝え、日本語教育コースの歩みを紹介したいとの関係者の思いから今回の記念展示が実現したという。同展は本年2月16日(火)まで。無料。



冬の子どもまつりを開催(12/20)



「第33回冬の子どもまつり」が12月20日(日)、本学で開催された。当日は好天には恵まれたものの、非常に寒く、防寒服で身を包んだ親子連れが目立った。今年5月に開催された子どもまつり(1600人以上参加)と比較すると、子どもの参加者(507人)は少なかったが、参加した子どもたちはみんな元気いっぱい。風車を作ったり、人形劇を観たり、体育館で跳びはねたりとそれぞれの企画を思い思いに楽しんでいた。

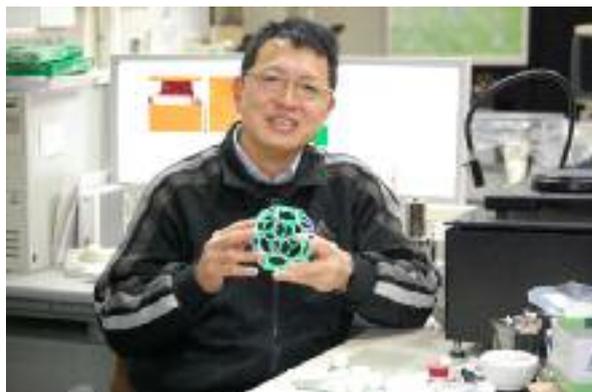
第二体育館でのボウリングやゲートボールの道具はすべて手作りで、子どもたちは目を輝かせて何回もチャレンジしていた。

本学の子どもまつりは、40年余の歴史があり、地域住民にも浸透。子どもまつりは、実行委員

会のメンバーが4カ月前から計画し、企画から宣伝、当日の運営、案内の看板作成に至るまで、万全の準備をした上で臨んでいる。彼らは「子どもの喜ぶ顔を見ると全ての苦労が報われる」と話す。教育実習前の学生が子どもたちと触れ合う絶好の機会でもあり、まさに本学ならではの企画。本学の春と冬のまつりは学生と子ども双方にとってかけがえのない一大地域イベントに成長した。



「摩擦の科学」会議を主催した三浦浩治教授インタビュー



本学主催による「摩擦の科学 2009 年国内会議」が12月3日(木)~5日(土)、名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で開催された。物理、機械など広範な分野の専門家が「摩擦」をテーマにそれぞれの研究を確認、情報交換するユニークな会議で、今回が3回目。成果や最終年の2010年へ向けた抱負などを三浦浩治教授(理科教育講座)に聞いた。

会議の意義、成果は。

「地震が砂の摩擦で、人体の関節にも摩擦があるように摩擦は原子スケールから地球規模までその研究分野は多岐にわたっています。動く物には摩擦があり、常に最先端の理論が求められています。違った分野でも共通項を探る価値があるユニークな会議で、今回も約80人が参加して、レベルの高い研究発表が行われました」

摩擦研究が注目される理由、現代性は。

「例えば自動車もパワーを発揮するものから電気自動車や燃料電池車に変化しています。より摩擦を少なくするのはエネルギーの問題からも重要で、環境面や社会的課題を具体的に解決していく時代だと思います。私がしている超潤滑グリース、オイルの研究もエネルギーロス防止との接点が見えてきたところですね」

4回目の会議への抱負を。

「最初はこの分野の世界のトップとの交流を通して理解を深めようと思いました。最近は存在が知られるメンバーも出てきたので次回はさらに高いレベルでの交流を実現したいと思います」

先生の研究は科学技術振興機構(JST)の産学共同の企業ニーズにつながる研究「FSステージ」として採択されました。今後の研究目標、抱負を。

「採択はありがたい。本学にとってもいいこと。超潤滑油システムの構築が目標で、メカニズムの実用化、制御や新素材の開発を目指しています。実用化は大変ですが、基礎研究による解明は確実に進展しています」

学生へのメッセージを。

「摩擦に関する講座は必ずしも大きな(総合)大学にあるわけではありません。摩擦という日常的な現象を科学し、しかも最先端が求められている科学技術に接する意味は大きいと思います。重要かつ面白い摩擦をサイエンスとしてぜひ本学で学んでほしいと思います」

お知らせ・投稿・報告

附属岡崎中学生3人がジュニア数学コンクールで入賞

2009年8月9日に行われた「第13回日本ジュニア数学コンクール」で、愛教大附属岡崎中2年の丸山泰君が最高賞の大賞、2年の西脇康平君が優良賞、3年の小田猛君が奨励賞に輝いた。名古屋大学主催の同コンクールは、全国から数学好きの62人が参加して行われた。問題は高校生対象のコンクールと共通で、どの問題もユニークな内容はもちろん、問題文が非常に長く、問題

の意味をとらえることも難しいのが特徴。さらに、どんな参考書やノートを持ち込んでもよいことも特徴の一つで、これは、数学的なものの考え方ができるかどうかを見るため。制限時間が約5時間あるので、じっくり考えて解答を導くことができる。丸山君は「球の連なり」の問題で、数珠つなぎの球が「三つ葉結び」や「8の字結び」の結び目を作るのにそれぞれ最低いくつ必要か、などの考え方を文章にまとめたものが高評価に結びついた。



(写真は入賞した3人。左から西脇君，丸山君，小田君)

大賞：丸山泰君のコメント

数学、それはすべての学問を支配する学問。僕はそう思う。
 この世界には、化学、物理、天体、生物、文学、言語など、さまざまな学問が存在する。数学コンクールでは、上記のことを数学的に考えるのだ。今回自分は、大賞という名誉ある賞を頂いたが、このコンクールにより、大賞よりも大切なものを手に入れることができた。
 今後は、「数学のため」の数学ではなく、すべての学問のための、世界のための、何より自分のための数学を学び、研究していこうと思う。

優良賞：西脇康平君のコメント

数学の追究を学び始めてほんのわずかでの受賞なので、まったく予測していませんでした。私の熱き闘志が通じたということだと、考えています。
 今後は知識を増やし、数学オリンピックで好成績を残したいです。

奨励賞：小田猛君のコメント

最初は、興味本位で数学コンクールの問題を解いてみました。しかし、解いていくうちに、自分も受けてみたいと思うようになりました。そこで、実際コンクールに参加し、数時間かけて問題と向き合いました。数学が好きというのもあって、その時間は、決して苦ではありませんでした。
 今回は入賞しましたが、上には上がいるので、これからも日々精進していきたいです。

本学寄贈バス、アフリカ女子大で贈呈式(NPO代表が報告)



愛教大の大型バスの贈呈式が11月24日(木)、ジンバブエの首都ハラレにあるアフリカ女子大学で行われた。NPO法人代表の岩淵剛理事長(愛知県三好町)の尽力で寄贈が実現、ジンバブエの状況変化の中で、粘り強い交渉、慎重な手続きを経て、去る6月25日に本学を出発したバスは1万数千^{km}離れたアフリカに到着、その後同女子大へ無事、届けられた。輸送計画の準備期間を含めると約1年ぶりの贈呈式

となった。

バスの除幕、大学講堂での贈呈式に出席した岩淵氏によると、式には森田幸一日本大使はじめ大学理事長(ジンバブエ初代文部大臣)、副学長、学生ら100人以上が参加。大学混声合唱団の歌が披露され、副学長が歓迎のあいさつ。愛教大を紹介した後、副学長は感謝の言葉に加えて両大学の学生、教員交流事業に取り組む意向を表明したという。続いて森田大使、岩淵氏がスピーチ。岩淵氏は日本から持参したアフリカ女子大との交流を期待する松田正久学長のメッセージを代読、寄贈の経緯などを説明した。

バスは愛教大のシンボルマークと「A I C H I U



NIVERSITY OF EDUCATION」の文字はそのまま残っており、それに重ならないように両サイド、後部に「WOMEN'S UNIVERSITY IN AFRICA」と書かれていたという。バスは女性1人を含む6人が運転業務に携わり、運転日誌を付ける体制だったという。「11月24日に行われたデモドライブの運転は完璧で、安全運転で感激しました」と岩淵氏。

アフリカ女子大学副学長からの松田学長宛に届いたメッセージには「素晴らしい贈り物に感謝します。バスは大事に使わせていただきます。貴学との学生、教職員の交流についての交渉を2010年にも始めたい」と書かれていた。

大型バスは71人乗りディーゼル車。愛教大で学生見学授業などに使われてきたが、維持費の節約などから廃車とし、贈呈先を検討。岩淵氏の尽力でバスとパソコンセット4組の寄贈が決まったものの、輸送経費、ジンバブエの状況などから贈呈式が先送りされていた。ビッグな贈り物が国を超えて無事届いたことで、大型バスが縁結びとなって両大学の交流が促進される可能性もある。

環境報告書で本学が「省エネ日本一」(投稿)

愛教大省エネ日本一[環境重視型キャンパスの創造]を目指してきた愛教大への一つの評価 -

このたび、エネルギー使用量とCO₂排出量について、60国立大学法人中の本学の位置が判明した。本学も団体会員として所属する大学等環境安全協議会では、「環境報告書ベンチマーキングと環境管理システムに関するプロジェクト研究(京都大学環境保全センター酒井伸一教授代表)」により、2006~2008年の3年間に公表された60大学の環境報告書のデータ分析を行った。それによると、環境報告書発行が義務付けられている全国の60国立大学法人の中で、少なくとも2006,2007年度の2年間、愛知教育大学は床面積、及び構成員当たりのエネルギー使用量、および大学あたりの二酸化炭素総排出量が最小だったことがわかった。第二期中期目標として「環境重視型エコキャンパスの創造」を掲げている本学にとって喜ばしい結果を得た。

ベンチマーキングとは、修正や改善を目的に、特定の指標を使って比較して現在の位置を確認する手法を意味しており、この研究プロジェクトでは環境パフォーマンスと基礎データを用いて、大学におけるCO₂排出量削減シナリオや大学の環境管理のあり方を検討している。ただし、ベンチマーク研究は始まったばかりで、大学、地域によりデータの取り方が異なることに注意が必要。愛教大はエネルギーの使用量が少ない分、CO₂排出量でも最小となった。エネルギー使用量、CO₂排出量は、学部学科構成、病院の有無、自然環境条件の違いにも影響される。教員養成系4大学で比較しても最小であったこと、世界的な研究成果や特色ある教育プログラムを開発する活動を行いながら、床面積あたりのエネルギー使用量では、小中高校に近い値で抑えられていることは、これまでの環境対策は評価できるであろう。

老朽化施設の改修工事等にあわせて、省エネタイプ(ガスヒートポンプ式)の空調機器の選択、重油焚きボイラーの一部停止、太陽光発電、人感センサー対応照明など積極的に環境配慮対応を進めてきた。また、事務室等はお昼休みに照明を消し、講義終了後には講義室消灯を心がけ、帰宅時に待機電力節約の奨励など、細かい対策が実を結んだと思われる。

上記プロジェクト研究の正式な報告書は、今年度中に公表される予定である。

(保健環境センター 榊原 洋子講師)

井戸准教授からのフィンランド便り (投稿)

新年あけましておめでとうございます。

こちらではクリスマスが日本の正月のような感じですから、それを過ぎるとまた普段と変わらない日々が続く、新年となっても日本のような正月ムードは一切ありません。クリスマスも日本のそれとは違い派手さもなく、24,25日には教会へ向かったり家族と共に家でゆっくり過ごすのが習慣ですから、街から人が消えてしまいます。当然店は全て閉店、公共交通機関もストップしますので家で過ごす以外ありません。気温は概ね氷点下15度程度、雪はそれ程深くありませ

ん。日照時間は5時間程度ありますが、常に厚い雲に覆われているので太陽を拝むことは滅多にありません。

私の年末はフィンランド人に見習い、日本とは全く違う形で過ごすこととなりました。クリスマスは3日間パーティが続き、年の瀬となった28日には隣国エストニアへ。また30、31日は私をフィンランドに招いて下さった教授宅でこれぞ「ザ・フィンランド」というような二日間を過ごして来ました。



本日は日本に居たら考えられませんが、ここに居たからこそ実現できた師走のエストニアトリップについてお伝えしようと思います。エストニアは首都タリン、バルト三国の一つですが、ヘルシンキから海を挟んで80キロ程度しか離れておらず、フェリーで2時間で着いてしまいます。デンマークやドイツ、スウェーデン、ロシアと外国勢力に支配されてきた歴史を持っており、私達日本人から見ると旧ソ連という感覚が強く、決して馴染み深い国ではありません。今回はヘルシンキで知り合ったチェコ人の友人が私の誕生日プレゼントにとタリンに連れて行

ってくれました。タリンの気候はヘルシンキに近く、やはりこの時期は雪で覆われています。街の歴史はヘルシンキよりも古く、また旧跡が良い保存状態で残されているため世界遺産にも登録されています。これらを観ることはデザインの見地からしても大変有意義な機会であり、まるで画集の中にもいような感覚に陥りました。経済的にはフィンランド企業の進出が多く見られ、また、IT産業が活発です。現在日本とのコミュニケーションにも欠かせず利用している「Skype」もタリンで開発されたものとのこと。古い街並からはそういったテクノロジーが微塵も感じないため、そのギャップに驚きます。日帰りだったため十分な時間を費やすことができませんでしたが、気候の良い時に再び訪れてみたいと思わせる魅力に溢れていました。

さて、冬至を過ぎましたのでこれから少しずつヘルシンキも陽が長くなり、自然も人々も益々生き活きしてくるものと思われます。私もそこに乗っかって日常生活、研究活動を楽しみたいと思います。
(井戸 真伸)

編集後記

2010年がスタートしました。当地は寒波に覆われた寒い正月だったものの、まずまず平穏で、皆さんもいい初春を迎えられたことと思います。新聞各紙の新年号に目を通しましたが、明るい展望を示す記事は少ない気がしました。私たちが最も関心を持つ「教育」を中心とするこの国の行方も不透明感が漂っていますが、昨年創立60周年を祝った本学の歴史、伝統を守りつつ、新しい目標に向かって着実に歩み続けることが大切だと思いました。本号は前号に続く「一般公開第2号」です。広報担当としても皆さんのご協力の下、情報発信のさらなる進展を期したいと思っています。本年もご指導をよろしくお願いいたします。(N)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

編集責任者:総務担当理事 折出 健二